

Klaus Dieter Thieme :

*Zum Problem des  
rhythmischen Satz-  
schlusses in der deut-  
schen Literatur des  
Spätmittelalters*

橋本郁雄

本書は、中世後期のドイツ語散文における文末リズムの問題を追究した労作であるが、私は注目すべき《アッカーマン》研究文献として、ここに紹介の筆をとることにしたい。

《アッカーマン》(Der Ackermann aus Böhmen ボヘミアの農夫)は、1400年ごろ、北ボヘミアのSaaz市の書記ヨハネス・フォン・テプル(Johannes von Tepl)によって書かれた、全篇34章より成る対話形式の散文の作品である。ボヘミア生れの農夫(アッカーマンは農夫の意であるが、ここでは、ペンなる鋤で紙の畑を耕す筆耕の人、つまり文筆家を意味し、市書記であった作者自身ともみられる)は、愛妻を奪った死神の所業を弾劾し、その償いを求めるが、死神は辛辣な皮肉をもってこれに応じ、両者の間には、32章にわたって激論が戦わされる。論争はいつ果てるとも見えないが、ついには神の裁きを仰ぐことになり、農夫には名誉を、死神には勝利を、という神の判決が下る(第33章)。最終章は「祈りの章」である。論争が終結し、農夫は神に敬虔なる祈りをささげる。そして神の栄光を讃え、妻の冥福を祈って全篇は終わるのである。

中世後期に成立したこの作品は、深く中世の伝統に根をおろしながら、またドイツ初期人文主義の記念碑的な作品として、文学史上特異な地位を占める。しかし、この作品が一

般の関心を惹くようになったのは、そんなに遠いことではない。高々、半世紀来のことである。すなわち、1917年Konrad BurdachとAlois Berntが、《Vom Mittelalter zur Reformation》叢書の第3巻として、詳細な資料、コメンタール、グロサールづきの《アッカーマン》のテキストを刊行して以来、《アッカーマン》の評価はにわかに高まったのである。つづいて、1926年には、続篇としてBurdachの大著《Der Dichter des Ackermann aus Böhmen》が上梓され、ここに《アッカーマン》研究の基礎が築かれ、爾来、この作品の研究は年を追うて盛んとなり、いまや、ゲルマニスティク分野において、もっとも研究の集中する作品の一つとなっているのである。たとえば、L. L. Hammerich—G. Jungbluth: Der Ackermann aus Böhmen I (Bibliographie, Philologische Einleitung, Kritischer Text mit Apparat, Glossar). København 1951の文献目録(同書7—18ページ)には、ゴットシェート(J. Chr. Gottsched)の最初の言及(1748年)にはじまり、1950年に至る間にあらわれた200を越える文献が、年代順に掲げられ、とくに今世紀20年代以後の、この作品をめぐる研究の盛況ぶりを伝えている。その後の研究については、Der Ackermann aus Bohmen. Textausgabe von Arthur Hübner. 3. Aufl. Leipzig 1965の文献表(XXVI—XXXIページ)が、1950年から1963年までの文献を、ほぼ網羅的に掲げているが、この間に刊行された校訂本が、7種にもものぼるのは驚くほかはない。前掲Hammerich—Jungbluthをはじめ、Willy Krogmann (Wiesbaden 1954)、K. Spalding (Oxford 1950)、M. O'C. Walshe (London 1951)などの研究が、50年代の前半に、テキストの編纂となって結実したことは、特筆に値するであろう。また、この間にあらわれ

た翻訳は、現代ドイツ語訳6点、ほかに英訳、スペイン語訳がそれぞれ1点ずつ。研究論文はおおよそ70篇を数え、校訂本に対する論評はじつに20篇を越える。まことに《アッカーマン》研究は、50年代に新しい段階に入った観があるのである。1964年以後の研究については、まだまとまった文献目録はないようであるが、私の手もとに集められただけでも、論説10篇、単行本5冊がある。単行本についていえば、さきあげたヒューブナーのテキスト第3版のほか、Gerhard Hahn: Johannes von Saaz. Interpretationen zum Deutschunterricht an den höheren Schulen. München 1964, イタリア語による対訳を収めた Luigi Quattrocchi: Johannes von Tepl. Il villano di Boemia. Introduzione, testo, versione e nota filologica. Roma 1965, 過去40年間の《アッカーマン》に関する重要論文11篇を再録した Ernst Schwarz 編: Der Ackermann aus Bohmen des Johannes von Tepl und seine Zeit. Wege der Forschung Bd. CXLIII. Darmstadt, およびここに紹介しようとする Thieme の論文である。

Thieme の論文は、標題に《アッカーマン》研究を打ち出してはいないけれども、研究の出発点も、また論究の中心も《アッカーマン》のリズム構造の問題にある。著者は《アッカーマン》第1章と、14世紀の神秘主義者 Heinrich Seuse の散文との対比をもって論述を開始する。前者がゾイゼに比して、はるかに技巧的なリズムをもつことは、一読すればあまりにも明瞭である。

《アッカーマン》の開巻劈頭、農夫は死神に対して激しい呪詛と罵詈を浴びせる。

Grimmiger tulger aller leute, schedlicher echter aller werlte, freissamer

morder aller menschen, ir Tot, euch sei verfluchet! (引用は Hübner 本による)

なんとリズムカルな言葉であろう。そこには韻文さながらのリズムの躍動がある。Thieme は、《アッカーマン》第1章のリズムを分析して型、 $\text{— — — — —}$ 型、 $\text{— — — — —}$ 型、 $\text{— — — — —}$ 型の3種のリズムが、反復してあらわれることを指摘しているが、このようなリズムの繰返しは、単なる偶然のなせるわざとは思われない。作者にリズム化の意図があったればこそであろう。そして Thieme は、ここに、中世ラテン語のいわゆる *cursus* の受容、ないし模倣をみようとするのである。つまり、本書はこのような推測を主張へ導くための実証の試みであり、したがって、論証はもっぱら *cursus* 理論をめぐって展開するのである。<sup>(2)</sup>

しかし、著者は、従来の *cursus* 理論に無批判に依拠することなく、Andreas Capellanus の“*Liber de amore*”を材料に、まず自ら *cursus* の型を統計的に割り出し、

- (1) *cursus velox: infámia dénotári*<sup>(3)</sup>
- (2) *cursus planus: vidétur amóri*
- (3) *cursus tardus: vitáre sequéntia*

の三つの型を得るが、これは、たとえば、K. Strecker: Introduction to Medieval Latin. English Translation and Revision by R. B. Palmer. Berlin 1957 (86—90 ページ) に解説されているところと本質的には変わらない。これによれば、《アッカーマン》の第1章にいちじるしいリズムの型のうち、 $\text{— — — — —}$ 型と、 $\text{— — — — —}$ 型とは、語数・音節数など、構造は異なるけれども、リズムはそれぞれ *cursus planus* および *cursus velox* と一致するのである。これまでに、《アッカーマン》における *cursus* に着目した学者は少なくないが、しかし、Burdach

も、Joachim Weber も、Hübner も、Krogmann も、《アッカーマン》の作者が *cursum* を意識的に修辞手段として用いたとする  
 ことには躊躇し、反対している。ところが、Thieme はドイツ語における *cursum* の受容  
 ないし模倣を確信し、以下に述べる種々の手  
 続きによって、これを確証しようと試みるの  
 である。まず彼は、中世ラテン語の原典と、  
 中世後期にあらわれたその翻訳とにおける文  
 末リズムの関係を比較検討する。最初に採り  
 あげたのは、『*Liber de amore*』と 14 世紀  
 におけるそのイタリア語訳である。両者  
 における *cursum* の分析から、Thieme は、そ  
 こにラテン語のリズムを再現しようとする翻  
 訳者の努力を看取するのである。ついで、  
 『*Regula Benedicti*』とそれに対する 6 種の  
 中高ドイツ語訳、さらに『*Stimulus amoris*』  
 と Johann von Neumarkt のドイツ語訳  
 とが対比され、その結果、さきのイタリア語  
 の翻訳とラテン語の原典との間におけると  
 同く、ここにもまた *cursum* 模倣の意図を確  
 認するのである。構造を異にする言語間の文  
 末リズムに一致がみられるとき、それは単なる  
 偶然とは考え難い。そこに意識的模倣をみ  
 るのは、おそらく正しいであろう。しかし、  
 従来のように、中世ラテン語の *cursum* 理論  
 を、そのまま構造を異にするドイツ語にあて  
 はめると、そこに矛盾が生じる。Thieme は、  
 この矛盾を避けるためには、構造にリズムを  
 優先させなければならないと考える。彼は、  
 リズム優先の立場に立って、ドイツ語におけ  
 る *cursum* の諸型を、次のように二つの基本  
 型に分け、多様なヴァリエーションを、この両型  
 に包摂させる。

### I. 3重アクセント型 (∟∟∟)

① 標準 *velox* (=velox 1): ∟---∟  
 ---∟

② 拡大 *velox* (=velox 2): ∟---∟

---∟

③ 短縮 *velox a* (=velox 3): ∟-∟-  
 ∟-

④ 短縮 *velox b* (=velox 4): ∟---∟  
 -∟

⑤ 転位 *velox* (=velox 5): ∟-∟-  
 -∟-\*

\* *velox* 5 は *velox* 1 の前 2 節  
 が転位したもの

### II. 2重アクセント型 (∟∟)

① *cursum planum*: ∟---∟-

② *cursum tardum*: ∟---∟---

③ *Dispondiacus*: ∟---∟---

このように、ドイツ語にあらわれる *cursum*  
 の諸型を、リズムの上から 2 重アクセントと  
 3 重アクセントの二つの基本型のもとに編成  
 し直したのち、*cursum* 受容の可能性を、さ  
 らに《アッカーマン》において確認しようと  
 するのである。

《アッカーマン》の作者とプラハの宮廷や  
 イタリア・ルネサンスの文章家たちとの間の  
 密接な関係から、彼の作品に *cursum* の受容、  
 ないし模倣を十分予想することができる。ま  
 た、原作に添えて、作者がプラハの友人に書  
 き送ったラテン文の手紙、すなわち 1933 年  
 K. J. Heilig によって、フライブルク大学  
 図書館所蔵のある書写本の中から発見され  
 たいわゆる「献呈書簡」も、作者がラテン語の  
*cursum* に熟達していることを示しているが、  
 Thieme はこの手紙の二つの箇所に着目する。

その一つは、作者が作中に用いた種々の修  
 辞上の手段について、注意深い「聴き手」な  
 ら気づくであろう、と述べている次の条り  
 である。

*Multa quoque alia et tamquam  
 omnia, utcumque inculta, rhetorice  
 accidentia, que possunt fieri in hoc idio-  
 mate indocili, ibi vident, que intentus*

inveniet *auscultator*.

ここで「読者」といわず、「聴き手」(*auscultator*)といているのは、朗読によって耳に訴える修辞的手段としての *cursus* を暗示している、と Thieme は解するのである。

またの箇所は、

*Illic currunt cola, comma, periodus modernis situacionibus.*

で、*currunt* が *cursus* と語原を同じくし、かつその機能語である点を重視するのである。

《アッカーマン》が修辞法の習作であることを強調したこの書簡の内容を、額面通りに受け取ることには問題があるとしても、*auscultator* と *currunt* の2語を作品における *cursus* 使用と関係づける Thieme の解釈は興味深い。

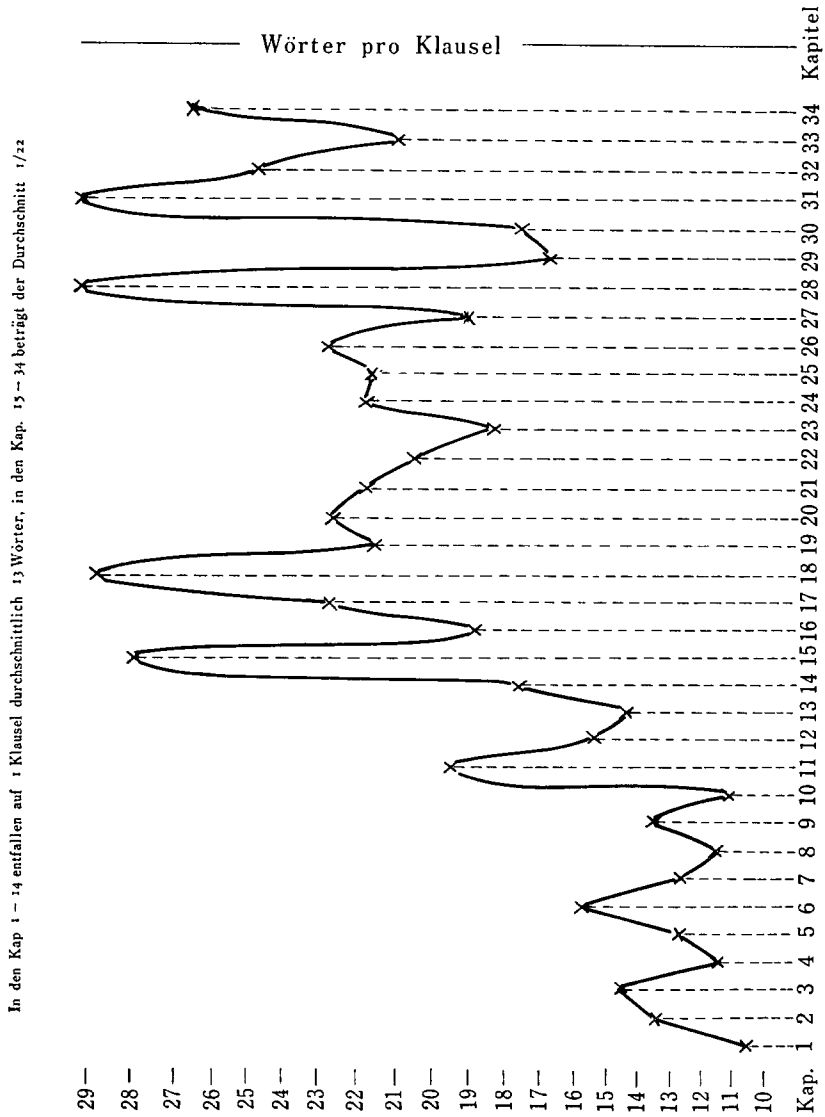
このように、「献呈書簡」にヒントを見出した Thieme は、つづいて、*cursus* が作中どのように用いられているかを、具体的に考察する。そして章ごとに細かく点検した文末リズムを別表のようにグラフで示している。

このグラフは、各章における *cursus* の頻度を語数との関係で示したものであって、*cursus* の頻度数は、平均 10.4 語に1回の割りりで *cursus* があらわれる第1章がもっとも高く、1 *cursus* に対して 29.8 語を示す第31章がもっとも低い。すなわち、グラフの曲線の谷が深ければ深いほど、頻度数は多く、曲線の山が高いほど、頻度は少ないことになる。興味深いのは、第15章に至り、1 *cursus* に対する平均語数が急カーブで上昇していることである。第15章を境として、前半と後半では、*cursus* のあらわれ方が著しく違うのである。第1章から第14章までを平均すると、1 *cursus* あたり13語であるのに、第15章以下最終章までは、平均 22

語となる。つまり、《アッカーマン》のリズム化は、後半目立って衰える。しかし、この表はあくまでも *cursus* によるリズム化をグラフにしたものであって、一見リズム化が弱いように見える最終章が、じつは散文詩ともいふべき美しい章で、彫琢されたリズムがみなぎっているということもある。<sup>(4)</sup> そもそもこの章は、対話形式のこの作品の、いわば枠外にあり、そこには他の章とは違ったリズムが支配しているのである。Thieme の推定によれば、この「祈りの章」は、他の章にさきがけて書かれ、はじめ作品の巻頭に置かれるはずであったのが、のち全体を締めくくるために、最後に配され、掉尾を飾ることになったのであろうという。《アッカーマン》は短篇のせいか、これまで章の成立順序が問題にされることは少なかったが、この意味でも、Thieme の仮説は一つの問題提起として注目に値しよう。第15章において、作品の調子ががらっと変わることから、Hammerich などは、第15章から第32章まではあとからつけ加えられたのではないかと考えているが、Thieme 論文は、リズムの側から、これに有利な証言を提出したのもといえるのではないだろうか。これに関連して紹介しておきたいのは、「献呈書簡」の冒頭の *cum libello ackerman de nouo dictato* をめぐって Jungbluth から提出された新しい解釈である。この箇所は、ふつう「最近著わされたアッカーマンの書物とともに」と読まれているけれども、Jungbluth はこれに対して、「新たに書き改められたアッカーマンの書とともに」と解すべきではないか、つまり、《アッカーマン》には新旧二つの草稿があったのではないか、という疑問を提出しているのである。<sup>(5)</sup> これは今後究明されるべき重要問題の一つであらう。

さて、Thieme はヒューブナー本をもっとも重視するが、他の三つの重要な校訂本につ

Graphische Darstellung über die Häufigkeit der Klauseln im «Ackermann aus Böhmen»



校訂本	vel. 1	vel. 2	vel. 3	vel. 4	vel. 5	planus	tardus	cursus 総計
Hübner	97	15	115	5	32	195	19	478
Burdach	101	8	104	3	15	193	24	448
Krogmann	74	5	94	5	18	175	13	384
Hammerich- Jungbluth	45	9	121	10	15	106	18	324

いても、綿密な cursus 調査を行ない、すべての cursus を洩れなく拾いあげ、前述の分類法に従って区分している。ここにはテキスト別に cursus 数だけを表示しておこう。

上表に見るように、cursus はヒューブナー本にもっともよくあらわれる。なかでも、cursus planus が他の型に比し多く用いられるのは、ドイツ語のアクセント構造から説明される。Thieme はリズム分析の結果、《アッカーマン》がリズム化された Kunstprosa であること、また、cursus の機能として、章の区分、文の区分、内容の顕示、意味連関の指摘、そしてまた Rhythmuszwang によって、リズムの型はつづく型に影響を与え、いわば強制力を発揮して型の孤立化を防ぐことなどが明らかになった、としている。

《アッカーマン》の分析につづいて、Thieme はさらに、ブラハ官庁の勢力下にあり、《アッカーマン》と同じ文体領域に成立した4篇の散文—Johann Hartlieb: Das Buch aller verbotenen Kunst, Martin von Amberg: Der Gewissenspiegel, Thomas Peuntner: Die Kunst des heilsamen Sterbens, Bonaventura: De triplici via (in altschwäbischer Übersetzung) —における cursus 使用を調査し、ドイツ語における cursus の構造研究に有益な資料を提供している。調査の結果、ドイツ語の cursus の約10%が、リズムだけでなく、構造的にもラテン語のそれと一致することが判明した(「構造的にも一致する」というのは、たとえば、cursus planus ならば、リズムが2語より構成され、最終語が3音節語であるとき、

ラテン語のそれと構造的に一致する)。しかも cursus planus の模倣が他の型よりも成功しているのは、前述のように、ドイツ語のアクセントおよび語形成の規則にもとづくものである。Thieme は、彼の研究の結論として、cursus をドイツ語のアクセント法則にもとづき、偶然に発生したリズムの型とみる Alfred Hübner に反対して、中世後期の散文にあらわれる文末リズムが意識的な修辞法的手段であることを強調するのである。

以上が Thieme の Dissertation の概要である。《アッカーマン》は原本が失われている上、成立の時期が原本との間に半世紀、あるいはそれ以上の時間的へだたりのある写本(1449—1520)と古印刷本によって伝えられているので、Textkritik に多くの問題を残している。およそテキストの決定は研究の基礎条件であるが、今日なお定本と称すべきものをもたない《アッカーマン》のテキストは、e 一つの脱落でさえきわめて重要な意味をもつリズム研究にとっては、とりわけ不利な状況にあるといわなければならない。にもかかわらず、現行いずれの校訂本についても、Thieme の主張する作者のリズム化の意図を否定し去ることはできないであろう。いや、将来、リズムの面から、原典復元への道が拓かれる希望をまったくは捨てきれないのである。Thieme の試みは、もちろん盤根錯節を剖くものではないけれども、Stilkunstwerk としての《アッカーマン》の、まだ明らかにされていない側面に、一条の強い光をあてたものと評すべきであろうか。とくに主要な4種の

《アッカーマン》校訂本について、Thiemeが行なった徹底的な文末リズムの分析は、今後の Textkritik に幾多の示唆を与えるであろう。(1969年12月)

後記 著者 K.-D. Thieme は 1935 年ベルリンに生まれた。ベルリン自由大学、ミュンヘン大学でゲルマニスティックおよび哲学を専攻。ミュンヘンでは主として Hugo Kuhn, Ernesto Grassi 両教授のもとで研鑽を積み、1960 年、本書によってドクトルの学位を得た(主査は H. Kuhn 教授)。Dissertation のテーマは自ら選んだという。自著について、著者は筆者への私信の中で、《Am schlüssigsten scheinen mir heute die Analysen des „Ackermann aus Böhmen“ zu sein; die sonstigen Resultate sind es wohl mir im Rahmen der selbst gezogenen methodischen und inhaltlichen Grenzen.》と述べている。1963 年以來、著者はベルリンの高等学校に教鞭をとる傍ら、最近では主として哲学ならびに社会学の分野で仕事をしている(目下 Louis Althusser の“Lire le Capital”のテキスト編纂中)とのことである。

#### 注

(1) この紹介文の脱稿後、Günther Jungbluth の新しいテキスト Johannes von Saaz. Der Ackermann aus Böhmen. Band I. Heidelberg 1969 が届いた。本書の文献目録(14—29 ページ)には 1968 年までの研究文献が掲げられているが、これによれば、1964—1968 年の間にあらわれた《アッカーマン》関係文献は、私があげた 5 冊の単行本のほか、E. Skála: Die Entwicklung der Kanzleisprache in Eger 1310—1660. Berlin 1968 (これは教授資格取得論文として、すでに 1961 年にタイプ印刷で発表された)、その

他論説 18 篇、書評 4 篇(すべて G. Hahn: Die Einheit des Ackermann aus Bohmen, München 1963 に対するもの)である。Thieme 論文をとりあげた書評はまだ出ていないようである。

(2) cursus の発達を論じたものとして、G. Lindholm: Studien zum mittellateinischen Prosarhythmus. Stockholm 1963 がある。Thieme 論文の文献目録には 1960 年以後の文献はないので、参考までにあげておく。

(3) Thieme 22 ページに *infamia denotari* とあるのは誤植であろう。

(4) Thieme は《アッカーマン》の各章のリズム構造を次のように三つのグループに分類している(98 ページ)。

- ① リズム構造のよく整った章:  
第 1—14, 29, 30, 34 章。
- ② リズム構造のゆるやかな章:  
第 16, 19—27, 32 章\*。
- ③ 明瞭なりズム構造をもたない章:  
第 15, 17, 18, 28, 31, 33 章。

\*Thieme は第 32 章を落としているが、これは第 2 グループに入れるべきであろう。

(5) Günther Jungbluth: Problem der Ackermann-Dichtung. Wirkendes Wort 1968, S. 153 および注(1)にあげた Jungbluth 校訂本の序文参照。

---

Klaus Dieter Thieme: *Zum Problem des rhythmischen Satzschlusses in der deutschen Literatur des Spätmittelalters*. München 1965, Max Hueber Verlag, 171. S.